

新指導要領に於ける諸問題(世界史)

木 村 明 人

新指導要領（昭和45年10月、昭和48年4月1日実施）における「世界史」の1目標、2内容、3内容の取り扱いの提示内容は多くの点で昭和31年、昭和35年の指導要領と異なるが、ここではそれら指導要領の「内容」として提示されたものを論じてみたい。まずそのための資料として昭和31年度版指導要領、同35年、そして今回の45年度版の「内容」とされているものを提示する。

昭和31年度

- (1) 文明の成立と古代国家
 - 原始社会の発展
 - 文明の成立
 - ギリシャの民主政治と文化
 - ローマ帝国とキリスト教
 - インド古代文化の発展
 - 中国古典文化の成立
- (2) アジア諸民族の活動と東西交渉
 - アジア諸民族の活動
 - 中国の貴族的文化の発展
 - 東西の文化交流
 - イスラム世界の発展とその文化
- (3) 中世ヨーロッパの社会
 - 西欧封建社会の成立
 - カトリック教会の発展と中世文化
 - 十字軍とヨーロッパ中世都市
 - 西ヨーロッパにおける国民国家
- (4) アジアにおける専制国家の変遷
 - 中国社会の推移と文化の発展
 - 蒙古帝国の成立と東西の交渉
 - 中国における専制国家の発展
 - ムガル帝国の盛衰
- (5) 欧米における民主主義の展開と近代文化
 - ルネッサンス
 - ヨーロッパの海外進出
 - 宗教改革
 - ヨーロッパの絶対主義国家
 - 市民革命の発展

- 産業革命とその影響
- 自由主義の展開
- 西洋近代文化の発展
- (6) 欧米列強の世界進出とアジア諸国
 - アジアの植民地化
 - 帝国主義の成立
 - 日清戦争・日露戦争
 - 中国社会の動揺と辛亥革命
- (7) 二つの世界大戦
 - 第一次世界大戦
 - ロシア革命とアジアの民族運動
 - ヴェルサイユ体制
 - 世界恐慌と全体主義の台頭
 - 第二次世界大戦
- (8) 第二次世界大戦後の世界
 - 国際安全保障体制
 - 大戦後の欧米諸国
 - アジア・アフリカ諸民族の解放運動
 - 冷たい戦争と緊張緩和政策
 - 現代の文化

昭和35年度

- (1) 文明の成立と古代国家の発展
 - 原始社会と文明の発生
 - ギリシアの民主政治と文化
 - ローマ帝国とキリスト教
 - 古代インド文化の発展
 - 中国古典文化の成立
- (2) 中国社会の展開とイスラム世界の形成
 - 北アジア諸民族の活動
 - 中国の貴族文化の発展と東西文化の交流
 - イスラム世界の発展とその文化
 - 中国における官僚国家の成立と征服王朝
- (3) 中世ヨーロッパの社会
 - ヨーロッパ封建社会の成立
 - カトリック教会の発展と中世文化
 - 都市の発達と中央集権国家への動き
- (4) 市民社会の成立と近代文化
 - ルネッサンスと宗教改革
 - 地理上の発見とヨーロッパ人の植民活動
 - ヨーロッパの絶対主義国家
 - 市民革命

- 産業革命と資本主義の発達
- 自由主義と国民主義
- 社会主義の運動
- 西洋近代文化の発展
- (5) アジアにおける専制国家
 - 中国社会の成熟とその文化
 - イスラム諸国家の盛衰
- (6) 列強の世界政策とアジアの近代化
 - 列強の進出と帝国主義下のアジア・アフリカ
 - 国際情勢の推移と日露戦争
 - 中国社会の動揺と辛亥革命
- (7) 二つの世界大戦
 - 第一次世界大戦
 - ロシア革命
 - ベルサイユ体制と民族独立運動
 - 世界恐慌と全体主義の台頭
 - 第二次世界大戦
- (8) 現代の世界
 - 国際連合の成立と国際情勢の動き
 - アジア・アフリカ諸民族の独立と解放運動
 - 現代の文化

昭和45年度版

- (1) 古代文化の成立
 - オリエント文化の成立
 - 地中海文化の成立
 - インド文化・イラン文化の成立
 - 中国文化の成立
- (2) 東アジア文化圏の形成と発展
 - 北アジア諸民族の活動
 - 中国の社会と文化の変遷
- (3) 西アジア文化圏の形成と文化の交流
 - イスラム世界の形成とイスラム文化
 - 東西文化の交流
- (4) ヨーロッパ文化圏の形成と発展
 - 西ヨーロッパ封建社会とカトリック教会
 - 東ヨーロッパの社会と文化
- (5) ヨーロッパ市民社会の成立と発展
 - 近代ヨーロッパの誕生
 - ヨーロッパ世界の拡大
 - 市民革命と市民社会の成立
 - 産業革命と資本主義経済の発達

- 自由主義・国民主義と社会主義運動
- ヨーロッパ近代文化の成長
- (6) アジアの専制国家とヨーロッパ勢力の進出
 - アジア専制国家の盛衰
 - ヨーロッパ勢力の進出と世界の分割
 - アジア諸国の動向と日本の近代化
- (7) 現代世界の成立と展開
 - 第一次世界大戦とアメリカ合衆国の発展
 - ロシア革命と社会主義運動の推移
 - 世界恐慌と全体主義の台頭
 - 第二次世界大戦
- (8) 今日の世界と日本
 - 国際連合の成立と冷たい戦争
 - アジア・アフリカ諸民族の独立と国家建設
 - 国際情勢の推移と日本

以上の資料を比較していただければ自明な通り、新しく「文化圏」学習というもののウェイトがかかって来ている。しかもこれに「適切な主題を設けて指導することが望ましい」（45年度版、P43）とある。しかし文化圏としての把握・理解というものは、この指導要領にあげられているものをみてもわかる通り時代区分、夫々の文化圏の相互関係という問題を含み、それらを基軸としなければならない主題学習とはあいられない。主題学習の有する長所である時間的移行の問題と、その主題の有する特色とは文化圏学習としての包括性の中では生かせない。一体当局の意図はどこにあるのであろうか。言うまでもなく、文化圏学習にその主たる意図があると見ていいであろう。即ち、文化圏として包括される歴史的世界の盛衰によって歴史を理解させようというのである。しかしここに大きな問題が蔵されているであろう。第一に文化圏としてあげられ得るものは一体どのような基準で設定されるか。第二にそれらの文化圏の時代的、時間的な背景は同一ではない場合が多い。第三にそれらの文化圏相互の関係をどのように評価するのか、強意に、その関係を解すれば、文化圏としての設定そのものが危うくなるであろう。弱意に解すれば、文化圏の独立化傾向を強く打ち出すことになり「世界史」とはなり得なくなるであろう。以上の三点の問題は単なる文化圏学習のみの問題ではないが、文化圏学習に強く残存する問題点としてあげられるであろう。しかも指導要領におけるかような「内容」の提示は、これを基とする教科書の編まれ方に強く影響を与えることを考慮せば、なお一層の問題となるであろう。上記の「内容」の三指導要領の変遷を見ていただきたい。ここで出されている文化圏は、東アジア文化圏・西アジア文化圏・ヨーロッパ文化圏の三つである。この三者でもって歴史を説明せよということは、三つの要素で現代の世界を説明せよということに続き、それを現代史の要素とせよとなる。かくて現代の世界は、東アジア文化圏とヨーロッパ文化圏の二極とその「交流」としての役割を歴史的に果たした西アジア文化圏をもって説かなくてはならぬことになる。現代は、従って先の2文化圏の対立・協調の時代と解することになる。こう解して来ると、45年版指導要領の「目標」(1)の「日本人としての自覚を深め……」との結接点は明らかである。

故に、私は、かかる文化圏学習の設定そのものの是非はともかくその設定のよって立つべき思想の問題が重要なりと思うものである。なぜなら、文化圏なるものの設定自体は現場におけ

る教師は大旨やっているし、又ある意味では前提としているとも言える。しかし、ここでの文化圏は、新指導要領内でのそれとは根本的に異った思索から出てきている。即ち歴史の普遍性と特異性・一般性と個性との問題として把握されている。歴史における普遍性や一般性を前提とせぬ特異性・個性はあり得ないからである。

歴史教育の本末が改めて問題となるであろう。歴史的事実の収積から一般性を抽象することは、歴史学における一つの正しい方途であろうが、この「個別から普遍へ」は一方通交ではないし、且又、文化圏という特殊と世界史という普遍との関係とは次元が異なる。学問的方法の確立を、我々は教育の現場における足場とせねばならぬとすれば学問的にも問題の多い、且つ議論の多い文化圏の設定は、一体何を物語るであろうか。